

## 閉会にあたって

木越 治

本日は、皆様、本当にありがとうございました。

発表された10名の方々、御講演をお願いしたお二人の先生、本当にご苦労さまでした。

ふだん、私たちが学会に参加する場合は、中世とか近世・近代といった時代別の学会、あるいは和歌文学会・俳文学会・説話文学会といったジャンル別の学会であることが多いわけですし、この会のように時代もジャンルも問わない研究集会というのは、国文系の学会としては比較的珍しい方になろうかと思われれます。と同時に、この学会は、外国人研究者にも広く門戸を開放しておりまして、今回も、発表者のうち日本人の方は一人しかいらっしゃいませんでした。念のため、公表できる範囲で選考経過を申し上げておきますと、本年度この研究集会での研究発表に応募された方は合計22名でした。委員会で選考した結果、今日の10名の方々をお願いすることになったわけですが、その過程におきましては、発表内容だけでなく、テーマとの関連性、時代やジャンルのなかなたよりを避けることとか、あるいは、これまでの発表実績等々さまざまな要素が関係しております。そういう次第ですから、今回選考に漏れた方でも次回にはお願いすることになる可能性もありますので、ぜひまたチャレンジしていただきたく思います。できるだけ、新しい方に発表していただきたいというのが委員会の一致した立場であることをもここで改めて申し添えておきたいと思います。

なお、来年度に関しては日程もテーマも決定しております。それにつきましても、この場をお借りしてアナウンスさせていただきます。

来年度は、11月13日（木）・14日（金）にこの会場で開催されます。テーマは、

剽窃・模倣・オリジナリティ

—日本文学の想像力を問う—

であります。どの時代の方でも、また、どのジャンルの方でも応募できるように、広範囲にわたるテーマを設定したつもりですので、たくさんの方が応募してくださることを期待しております。

昨日の午後から今日の午前中まで、10名の方々の発表に関して、会場からはとても活発な質疑応答がありました。時間の制約のために、司会者の方でやむなく打ち切りを宣言しなければならない例も一再ならずありました。発表だけではややわかりにくかったところも会場とのやりとりによって明確になったというような例もたくさんあったと思います。本集会では、やや多めに質疑応答の時間を設定しておりますが、来年度以降、もうすこし時間的に余裕を持たせるように考えていく必要があるかとも考えているところです。いずれにしても、こうした活発なやりとりは本集会の大きな特色として、今後とも大切にしていきたいと思っております。

ただ、ひとつだけ注文をつけるのであれば、せっかく会場から有意義な質問が出ているのに、それに十分に答えきれていない例がいくつかみられたことです。簡潔かつ適切に質問に應對できていれば、さらにそこから関連の質問へと発展していったらと推測されるにもかかわらず、最初の質問への應對に手間取ったために、以下の質問に進めないまま時間切れになってしまったという例がいくつかあり、せっかくの機会なのに、と残念に思うことがありました。発表に慣れておられない場合には、自分の発表だけで手一杯で質問への應對が充分にできない、というような事情は私にも経験のあることなのでよくわかるつも

りですが、せっかくの機会ですので、参加された方との対話ということにも心を配っていただければ、と思いました。

また、主催者側として反省しなければならないのは、もう少し参加者を増やすための努力をしなければいけないということです。近年は、各大学・研究機関等でも国文系の国際的な研究集会やシンポジウムの類が開催される機会が増えてきております。そうしたなかで、本集会の特色をどのように打ち出していくかは、これからの私ども委員の大きな課題であると考えておりますが、そうしたことも含め、もうすこし地道な努力を重ねていく必要があることを痛感しております。

この国文学研究資料館は、国立大学同様、来年度以降大きな転機にさしかかっていくこととなりますが、そうはいいまして、おそらくこの研究集会に関しては今後とも間違いなく続いていくはずであります。どうぞ、皆様、来年度以降も本集会にご参集いただき、ご協力をいただきたいと思います。

Last But Not Least（最後ではあるが、決して些末なことだと思っているわけではない、という英語の言い回しなのだそうです。参照：森巢博『無境界家族』集英社文庫）

この集会のスタッフとして最初から最後まで動き回っていただきました堀川さんはじめ国文学研究資料館の方々に心からお礼を申し上げて、閉会の挨拶といたします。

2002年11月15日